

国際仏教学大学院大学研究紀要

第 24 号（令和 2 年）

Journal of the International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Vol. XXIV, 2020

## 頭部における 7 つの prāṇa たちについて

伊 澤 敦 子



## 頭部における 7 つの prāṇa たちについて\*

伊澤 敦子

### 1. はじめに

prāṇa たちという語は、多くの場合 prāṇa を始めとする生体諸機能や<sup>1</sup>、prāṇa や apāṇa など 5 種類の prāṇa たちを指すが<sup>2</sup>、その他に頭部における 7 つの prāṇa たちという概念も見られる。これら 7 prāṇa たちは、ある祭事において重要な役割を担っている。それは、アグニチャヤナ（火祭壇構築祭）<sup>3</sup>の際に使用される切断された頭部を扱う祭事である。しかし、これらが実際にいかなるものなのかは必ずしも明らかではなく、訳語もまちまちである<sup>4</sup>。

本論では、アグニチャヤナを記載する諸テキスト（Yajurveda 系の諸 Saṃhitā と Śatapatha Brāhmaṇa）の該当箇所および関連箇所を精査し、

---

\* この論文は、2019 年 8 月 27 日にドゥプロヴニクにて開催された第 7 回 International Vedic Workshop において発表したものを増補改訂した日本語版である。

<sup>1</sup> 氣息、視覚、嗅覚、聴覚、発語機能、味覚、思考機能などを prāṇa の複数形で表す elliptischer Plural（省略の複数）。Delbrück 1888: 102, 600, Wackernagel-Debrunner 1954: 51, Hoffmann 1976: 387f. 参照。

<sup>2</sup> prāṇa に関する論考は数あまたあり、網羅することはかなわなかった。ここにはその一部の論文のみ挙げる。Ewing 1901, Brown 1919, 岩崎 1961, 中祖 1973, Mitchiner 1982, 浅野 1985, Bodewitz 1986, 1992, Brereton 1991, Blezer 1992, Zysk 1993, Fujii 1999, 長友 2011, 2017, 2019。それ以前の主な研究については、Mitchiner 1982: 292, n.2, Blezer 1992: 42, n.11 参照。

<sup>3</sup> Agnicayana は Soma 祭に組み込まれているが、正統的ヴェーダ祭式にはない要素を多く含む、複雑にして壮大な祭式である。1000 の煉瓦を 5 層に積み上げて祭壇を築き、そこにウカー（ukhā）という素焼きの器の中に 1 年間保持された火を移すというもので、この新しい祭壇は新たな Āhavanīya 祭火として機能する。

<sup>4</sup> vaital airs (Eggeling 1894), breaths (Keith 1914), vital functions (Brereton 1991), winds (Zysk 1993) など。

7つの prāṇa たちの実体を明らかにすべく考察を行う。

## 2. 切断された頭部を扱う際の7つの prāṇa たち

まず、切断された頭部に関する記述を検討する。アグニチャヤナにおいて、人およびその他の動物の頭を新しく積まれる祭壇の下に置く。これらは予め用意されるか、犠牲獣祭によって入手された頭部で、いくつかの祭祀行為によって祭式にふさわしいものとされる。次節に挙げるのは、そのうちの1つ、蟻塚を使用する祭事である。

### 2-1. 蟻塚の使用

**Kāṭhaka-Saṁhitā (KS) 20.8 (27,3-5), Kapiṣṭhala-Kāṭhaka-Saṁhitā (KpS) 31.10 (157,15-17)**

saptadhātṛṇṇām valmīkavapām pratinidadhāti. vyṛddham vā etat prāṇais. sapta śirṣaṇyāḥ prāṇāḥ. prāṇair evainat samardhayati.

彼（アドヴァリユウ祭官）は7つの穴の開いた蟻塚を〔人の頭に〕当てて置く。これ（人の頭）は prāṇa たちをなくしたのだ。頭部の prāṇa たちは7つである。他ならぬ prāṇa たちによってそれを完全にすることになる。

**Taittirīya-Saṁhitā (TS) 5.1.8.1**

vyṛddham vā etat prāṇair amedhyām yāt puruṣaśirṣām. saptadhā vītṛṇṇām valmīkavapām prāti nī dadhāti. sapta vāi śirṣaṇyāḥ prāṇāḥ. prāṇair evāinat sām ardhayati. medhyatvāya.

人の頭というものは、これは prāṇa たちを無くして供犠にふさわしくないのだ。彼（アドヴァリユウ祭官）は7つの穴の開いた蟻塚を〔人の頭に〕当てて置く。頭部の prāṇa たちは7つである。他ならぬ prāṇa たちによってそれを完全にすることになる。供犠にふさわしくなるように。

Maitrāyaṇi Saṁhitā (MS) と Śatapatha-Brahmaṇa (ŚB) には対応する部

分がない。<sup>5</sup> また、KS (KpS も含む、以後同) の当該部分は頭を祭壇の下に置く直前の段階で語られるが、<sup>6</sup> TS の記述はずっと前に位置する犠牲獣祭や祭主の潔斎の前に見いだされる。

KS と TS は、最初の2文の順序が逆である以外は、ほぼ同じである。頭部には7つの prāṇa たちがあるが、切断されるとそれらを失ってしまうので、7つの穴があげられた蟻塚を当てて prāṇa たちを補うのである。<sup>7</sup> 頭部には7つの prāṇa たちがある、という文言は他にもいくつかの

<sup>5</sup> ŚB と同派の KātyŚS にもやはりこの記述はないが、MS と同派の MānŚS には以下の記述がある。

MānŚS 6.1.2.24

ayaṁ yo asya yasya ta idaṁ śira etena tvaṁ śiṣṇyām edhi |  
ity chidre 'pinidadhāti saptadhā vidirṇāṁ valmīkavavāṁ sapta ca māśān.  
「誰であろうと君にとってこれが誰の頭であろうと、これによって君は頭を持つ者となれ」と [となえつつ]、[頭部の] 穴に7か所が穿たれた蟻塚と7つの豆を入れ置く。

しかし、ここで唱えられるマントラは MS にはなく、KS 38.12 (113,14) と ĀpŚS 16.6.3 にほとんど同じマントラがある。

<sup>6</sup> 先の KS 20.8 (27,3-5) は2-2 で扱う KS 20.8 (27,7-10) と近接している。両者の間には、以下の部分が入る：KS 20.8 (27,5-7)

yamagāthā gāyati. yamalokād evainad vṛṇkte | tisro gāyati. traya ime lokā.  
ebhya evainal lokebhyo vṛṇkte. tasmād gayate na deyaṁ. gāthā hy eva tad vṛṇkte.

Yama の歌を唱う。他ならぬ Yama の世界からそれ (人の頭) をねじり取ることになる。3 [詩節] 歌う。これらの諸世界は3つである。他ならぬこれらの諸世界からそれをねじり取ることになる。それ故、歌っている者に与えらるべきでない。gāthā がそれをねじり取ってしまうので。

<sup>7</sup> BaudhŚS は頭部と蟻塚両方の7つの穴を指して prāṇa たちと呼び、それらを合わせて置く、と指示する。VādhūlaŚS の以下に示す規定は特異である。

BaudhŚS 10.10 (9,11-13)

athādatte dakṣiṇena valmīkavapāṁ savyena samdamśena puruṣaśiraḥ. |  
prāṇaiḥ prāṇān samnidhāyāśaye valmīkavapāṁ nidadhāti |

次に、右手で蟻塚を、左手ではさみ道具によって人の頭を取る。prāṇa たち (蟻塚の7つの穴) と prāṇa たち (感官の7つの穴) とを合わせて、蟻塚の中身をその場所 (āśaya) へ置く。

個所に見られる。<sup>8</sup>

次に、もう1つの頭部への祭式行為を取り上げる。

## 2-2. 頭部に黄金片を置く

頭部はさらに黄金片によって完全なものにされる。この所作は本論で扱ういずれのテキストにおいても描写され、頭を祭壇の下に置く所作の直前に位置付けされている。

### MS 3.2.7 (26,17-19)

vyṛddhendriyāṇi<sup>9</sup> vái paśuśirṣāṇy ayajñiyāṇy amedhyāni. yác chidrēṣu hiraṇyaśakalāṇy apy ásyatīndriyēṇaivāināni vīryēṇa sámardhayati. mēdhyāny enāni yajñiyāni karoti.

動物たちの頭は indriya (感官力) たちが失われており、祭式に相応しくなく供犠に相応しくないのだ。穴たちに黄金片たちを差し入れる (apy ásyati)<sup>10</sup> ことで、他ならぬ indriya によって vīrya (精力的な力) によってそれらを完全にすることになる。それらを供犠に相応しく祭式に相応しいものにする。

---

VādhūlaŚS 8.9.3 (テキストは井狩先生の校訂による。以下同。)

ubhābhyāṃ valmikavapāṃ pratinidadhāti paśuśirṣāya paśave ca.

蟻塚を犠牲獣 (雄ヤギ? 人?) の頭と犠牲獣の〔胴体〕の両方に接置する。

<sup>8</sup> 例えば以下の場面で言及される。

ukhā を焼く: TS 5.1.7.1; KS 19.6 (8,2-3), KpS 30.4 (142,20-21); MS 3.1.7 (9,9-10)。新しい祭壇の場所を砂利で囲む: TS 5.2.6.3; KS 20.4 (22,8-9), KpS 31.6 (153,10-11)。新しい祭壇の場所に植物の種子を蒔く: ŚB 7.2.4.26。

<sup>9</sup> Mittwede 1986: 112 によると、Schroeder 1886: 26 では vyṛdhyaindriyāni だが、vái の前なので1つの複合語と看做すべき。また、indriya の vṛddhi 化は少なくとも Veda 期に関しては裏づけがない。更に KS 20.8 (27,8), KpS 31.10 (157,20) 参照。

<sup>10</sup> MS のみ apy-as-で、KS, TS, ŚB は praty-as-となっている。黄金片を置く場所を穴と明示している MS においては apy-as-「差し入れる」は適切な表現であろう。一方、praty-as-の第一義は「投げ入れる」であり、MS ほどは場所の指定が明瞭ではない他のテキストにおいてこの動詞が採用されるのは、理にかなっていると言えよう。

## KS 20.8 (27,7-10), KpS 31.10 (157,19-158,1)

apa vā etasmād indriyaṃ krāmati, prāṇās śīrṣan\* vīryaṃ cakṣuś  
śrotraṃ vāg. vyṛddhendriyaṃ vā etad amedhyaṃ mṛtaśīrṣam iti vā  
etad āhur. medhyaṃ hiraṇyaṃ. yad dhiraṇyaśalkaiḥ pratyasyati  
medhyaṃ evainad yajñiyaṃ karoty. ukhāyām apidhāya pratyasyati.  
pratiṣṭhām evainad gamayitvā prāṇais samardhayati.

\*KpS: śīrṣam

これ（人の頭）から indriya が去って行くのだ、頭部の prāṇa たち、  
[即ち、] vīrya、視覚、聴覚、発語機能が。「これは感官の力が失われた  
供犠に相応しくない死んだ頭である」というようなことを [人々]  
は言う。黄金は供犠に相応しい。黄金片を投げ入れる (praty-  
asyati)<sup>10</sup>ことで、それを他ならぬ供犠に相応しく祭式に相応しいもの  
にすることになる。ukhā (素焼きの土器) に入れてから [黄金片を]  
投げ入れる。他ならぬそれ（頭部）を安定に到らせてから、prāṇa たち  
によって完全にすることになる。

## TS 5.2.9.2-3

vyṛddhaṃ vā etāt prāṇāir amedhyāṃ yāt puruṣaśīrṣām. amṛtaṃ khālu  
vāi prāṇāḥ. || 2 || amṛtaṃ hiraṇyam. prāṇēṣu hiraṇyaśalkān prāty asyati.  
pratiṣṭhām evāinad gamayitvā prāṇāiḥ sām ardhayati.

人の頭というものは、これは prāṇa たちが失われており供犠に相  
応しくないのだ。prāṇa たちは不死なのだ。3) 黄金は不死である。  
prāṇa たちに黄金片たちを投げ入れる (prāty asyati)<sup>10</sup>。それを他な  
らぬ安定に到らせてから、prāṇa たちで完全にすることになる。

TS は再び、人の頭は prāṇa たち を失ったので供犠に相応しくない、と  
繰り返し、黄金片を置くことで prāṇa たち によって完全にするとする。  
ここでは prāṇa たちを7であるとは言っていないが、前節 (5.1.8.1) との  
関連から7と推測できる。しかし他の2つのテキストはこれとは異なっ  
ている。KS は人の頭は indriya (単数) を失ったので供犠に相応しくない、

とし、indriya を “prāṇās śīrṣaṇ vīryaṃ cakṣuś śrotraṃ vāg” と言い換える。そして、TS と同じく、黄金片を置くことで prāṇa たち によって完全にする。MS は人のみならず動物の頭についても indriya (複数) を失ったので供犠に相応しくないとする。黄金片を置くことで indriya, vīrya (単数) によって完全にする。最初の indriya が複数なのは、複数の頭を修飾する所有複合語を形成しているからであろう。

ここで注目したいのは黄金を置く場所についてである。TS は prāṇa たちとし、MS は穴 (chidra) たちと呼び、<sup>11</sup> KS は言及しない。<sup>12</sup>

ŚB 7.5.2.8-12 においても、人および動物の頭に同じ所作をするが、置く場所については、具体的に最初は口といい、次からは「ここ (iha)」と指示する。

<sup>11</sup> Mitchiner 1982: 293 はヴェーダ文献において prāṇa たちはまず頭部の穴 (耳、目、鼻孔、口) を意味し、氣息や生氣はそこから出入りする、と指摘する。しかしそれほど単純ではないことは、MS が頭部の穴を prāṇa たちとは呼んでいないことから明らかである。

<sup>12</sup> Śrautasūtra では口 (āśya)、目 (akṣi) 右左、耳 (karṇa) 右左、鼻孔 (nāsik) 右左などと指示するが、その順序は一定しない。BaudhŚS のみは prāṇa たちともいう (注7参照)。MānŚS は切り口 (vikartana) にも黄金を置く。

BaudhŚS 10.33 (30,20-31,4)

tasya prāṇeṣu hiraṇyāśalkāṇ pratyasyati. drapsāś caskandety āśye. 'bhūd idam viśvasya bhuvanasya vājinam iti dakṣinasyām nāsikāyām. agner vaiśvānarasya cety uttarasyām. agnir jyotiṣā jyotiṣmān iti dakṣiṇe 'kṣṇi. rukmo varcasā varcasvān ity uttara. ṛce tveti dakṣiṇe karṇe. ruce tveti uttare.

MānŚS 6.1.7.26

…hiraṇyāśakalāṇ apyasyati. ṛce taveti karṇe. ruce taveti savye. bhāse tavety akṣiṇi. jyotiṣe taveti savye. 'bhūd idam iti nāsikāyām. agnis tejaseti savyāyām. rukmo varcasety āśye. sahasradā asī sahasrāya tveti vikartane. //

ĀpŚS 16.26.13-16.27.4 口、目右左、両耳、鼻孔右左

KātyŚS 17.5.7-12 口、両鼻孔、両目、両耳

VādhūlaŚS 8.24.14-18 鼻孔を prāṇa という。



## ŚB 7.5.2.8-9, 11-12

āthaiṣu hiraṇyaśakalān prātyasyati| prāṇó vai hiraṇyam. ātha vā etébhyaḥ paśúbhyaḥ saṃjñāpyámānebhya evā prāṇā útkrāmanti. tát yád dhiraṇyaśakalān pratyasyati prāṇān evāiṣv etád dadhāti. ||8|| saptá prātyasyati| saptá vai śīrśān prāṇās. tán asminn etád dadhāti.... ||9|| ... ||10|| múkhe prathamam prātyasyati... ||11|| ṛce tvétihā... ||12||

8) 次に黄金片たちをこれら(頭たち)の中に投げ入れる(prātyasyati)<sup>10</sup>。黄金は prāṇa なのだ。そして prāṇa たちはこれら正に殺されている動物たちから去っていく。それで黄金片たちを投げ入れることで、他ならぬ prāṇa たちをこれらにこのように置くことになる。

9) 7つ〔黄金片たちを〕投げ入れる。頭部における prāṇa たちは7つなのだ。それらをこれ(頭)にこのように置くことになる。…

11) 最初の〔黄金片を〕口に投げ入れる。…

12) 「君への称賛のために」と、ここに〔投げ入れる〕。

以上をまとめて表に示す。

	頭の種類	失ったもの	注入するもの	黄金片を置く場所
MS	動物たち(人も含む)	indriya	indriya vīrya	chidra たち
KS	人	indriya	prāṇa たち	記述無し
TS	人	prāṇa たち	prāṇa たち	prāṇa たち
ŚB	動物たち(人も含む)	prāṇa たち (7)	prāṇa たち	mukha, iha

黄金片を置く場所に関して、TS による prāṇa たちとは、実際は MS の言う chidra (穴) たちを指しているだろう。prāṇa たちを失ったので供犠に相応しくないとされる頭の穴をも prāṇa たちと呼ぶのは、いささか奇異な印象を与える。また、prāṇa たちが穴を意味しているのだとすると、もう一方の7つの prāṇa たちは何を意味するのでしょうか。さらに、これらを MS のように区別することなく同じ語で呼ぶのは何故なのか。

MS においては、indriya と vīrya が並記され、KS においては、indriya は “prāṇās śirṣaṇ vīryaṃ cakṣuś śrotraṃ vāg” と換言される。indriya や vīrya と 7 prāṇa たちとはいかなる関係にあるのだろうか。

これらの問題点、すなわち、7 prāṇa たちの実体および indriya や vīrya との関係を解明するに当たって、7 prāṇa たちが生体諸機能等との関連で語られる部分を検討する必要がある。

### 3. 7つの prāṇa たちと生体諸機能等との関係

#### 3-1. 6 祭詞と 1 詩節

ukhā が焼き上がった後にこれを熱して火を灯すが、その直前の場面でも prāṇa たちが言及される<sup>13</sup>。

#### MS 3.1.9 (11,8-14)

śāḍ etāny ādhīta yajūṃṣi juhōti. śāḍ vā ṛtāva. ṛtūbhir vā etāt pṛthivyā vīryaṃ ūdyachate. nānā juhōti. nānāvīryā hīmē prāṇāḥ. prāṇānām vīdhṛtyai. yāṃ kāmāyeta badhirāḥ syād iti, tāsya sakṛt sārvaṇy anudrūtya juhuyāt. prāṇān asya sām̐bhinatti. badhirō bhavati. tasmād badhirō vācā vādāti. nā śṛṇōti. vācaṃ hy āsyendriyāṃ anupādyate. prāṇā vā etānītarāṇi chāndāṃsi. vāg anuṣṭūb. yād anuṣṭūbhā saptamāṃ juhōti, vācaṃ vā etāt prāṇēśūpasāṃdadhāti. tasmād iyāṃ vāk saptamī prāṇānām.

①これら6つの瞑想された祭詞たちを献供する。季節たちは6つなのだ。正に季節たちによってこの様に大地の力を高めることになる。別個に献供する。これらの prāṇa たちは別個の力を持つ (nānāvīryā) ので。prāṇa たちの分離の為に。誰かに対し、「耳が聞こえなくなるように」と望むなら、その人の為に、全ての〔祭詞を〕続けて唱えて

<sup>13</sup> 当該部分はテキストによってその収録位置が異なる。KS と TS は、犠牲獣祭の直後、ukhā を熱して火を灯す前に位置するが、MS と ŚB は ukhā が焼き上がった直後でこれを熱して火を灯す前に位置する。ŚB の対応部分には他のテキストのような prāṇa たちに関する記述はない。

から一度に献供するべし。彼の prāṇa たちを粉々にする。彼は耳が聞こえなくなる。それ故、耳が聞こえない人は言葉によって話す。[しかし] 聞こえない。何故なら、この者の indriya が言葉を追いかけるから。これら他の韻律たちは prāṇa たちなのだ。anuṣṭubh<sup>14</sup>は発語機能である。②7つ目を anuṣṭubh によって献供することで、この様にして、正に発語機能を prāṇa たちに加えることになる。それ故、この発語機能は prāṇa たちの中の7番目である。

### KS 19.10 (10,16-20), KapS 30.8 (144,5-9)

ṣaḍ ādhīṭayajūṃṣi juhōti. ṣaḍ vā ṛṭava. ṛtubhir evainaṃ dikṣayaty. ṛtubhir asyā vīryam udyacchate. saptaitāni juhōti. sapta prāṇāḥ. prāṇair evainaṃ dikṣayati. nānā juhōti. tasmān nānāvīryāḥ prāṇās cakṣuś śrotraṃ vāg. anuṣṭubhottamaṃ juhōti. vāg vā anuṣṭub. vācam evottamāṃ dadhāti. tasmād vāk prāṇānāṃ uttamā vihitam vadati.

①6つの瞑想された祭詞たちを献供する。季節たちは6つなのだ。他ならぬ季節たちによって彼（祭主）を潔斎させる。季節たちによってこの大地の力を高める。②これら7つを献供する。prāṇa たちは7つである。他ならぬ prāṇa たちによって彼を潔斎させる。別個に献供する。それ故、prāṇa たちは別個の力を持つ、[即ち、] 視覚、聴覚、発語機能。最後に anuṣṭubh によって献供する。anuṣṭubh は発語機能なのだ。最後に他ならぬ発語機能を置くことになる。それ故、prāṇa たちのうちで最後である発語機能は命令を発する。

### TS 5.1.9.1

ṣaḍbhir dikṣayati. ṣaḍ vā ṛṭava. ṛtubhir evainaṃ dikṣayati. saptābhir dikṣayati. saptā chāndāṃsi. chāndobhir evainaṃ dikṣayati. vīśve devāsya netūr ity anuṣṭubhottamāyā juhōti. vāg vā anuṣṭúp. tasmāt prāṇānāṃ vāg uttamā.

<sup>14</sup> 8 音節×4 半詩節からなる韻律の一種。

①6つによって潔斎させる。季節たちは6つなのだ。他ならぬ季節たちによって彼(祭主)を潔斎させることになる。②7つによって潔斎させる。韻律たちは7つである。他ならぬ韻律たちによって彼を潔斎させることになる。「全ての人が、導く者である神の」という、anuṣṭubh によって最後に献供する。anuṣṭubh は発語機能なのだ。それ故、発語機能は prāṇa たちのうちで最後である。

KS と TS の①と②の関係がわかりづらく、あたかも6つの献供の後に7つの献供の実行を規定しているような錯覚を招くが、まず6祭詞によって献供してから7回目に anuṣṭubh の詩節を唱えながら献供するという意味であろう。<sup>15</sup>

prāṇa たちは7つであると言明するのは KS のみだが、MS は vāc (発語機能)である anuṣṭubh を7番目とすることで7 prāṇa たちを暗示し、TS には7韻律等の7を意識した記述が見られる。

anuṣṭubh のマントラだけを他の6つのマントラから切り離し、更に anuṣṭubh を vāc と等置し、それを特に7番目、つまり最後に位置付けているということから導きだされる6+1という構図は、目鼻耳と口の組み合わせ以外に、北斗七星、7聖仙を連想させる。7聖仙は既に Ṛgveda (RV) や Atharvaveda (AV) で言及される。<sup>16</sup>

<sup>15</sup> ĀpŚS 16.8.13

yat prāḡ dikṣāhutībhyās tat kṛtvākūtyai prayujē 'gnaye svāheti pañcādhvarikīr hutvākūtim agnim iti śaḍāgnikīḥ. | viśve devasya netur iti pūrṇāhutim saptamīm. 潔斎の献供たちの前にやることをおこなって、'ākūtyai prayujē 'gnaye svāhā' と唱えつつ Soma 祭に関わる5つの献供を行ってから、'kūtim (MŚS 6.1.3.20 では ākūtam) agnim' と唱えつつ祭火設置に関わる6つの献供を[行い]、'viśve (MŚS 6.1.3.20 では viśvo) devasya netuḥ' と唱えつつ7番目に満たした手柄での献供を[行う]。

ちなみに、6祭詞は TS 4.1.9.1a、KS 16.7 (227,9-11)、MS 2.7.7 (82,7-9)、VS 11.66。7番目の詩節は RV 5.50.1、TS 4.1.9.1b、KS 16.7 (227,12-14)、MS 2.7.7 (82,10-12)、VS 11.67。

<sup>16</sup> AV 10.8.5

**RV 1.164.15 = AV 9.9.16**

sākamjānām saptātham āhur ekajām śal id yamā ṛṣayo devajā iti /  
tēsām iṣṭāni vihitāni dhāmasā sthātré rejante vikṛtāni rūpasāḥ //  
共に生まれるものたちのうちの7番目を人々は1人で生じたものと呼ぶ。「6人は正に双子たちで神々の出自の聖仙たち」と。  
望まれた[場たち]が彼らの領域に応じて分けられ、様々な姿に変えられて、彼らは不動のものに対して (sthātré)<sup>17</sup>震えている。

6人は双子であり7番目は1人で孤立している。即ち、3×2+1の構図である。これらの7聖仙たちが、Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad (BĀU) 2.2.3-4によって頭部の7 prāṇa たちと同一視されているのは知られているが、既にMSにも同様の指摘がなされている。<sup>18</sup>

**MS 1.5.11 (80,9-11)<sup>19</sup>**

té vā enenedyās. té vai té saptaṛṣāya evā. prāṇā vai saptaṛṣāyaḥ.  
prāṇān vā etād iṭṭā. iṭṭe ha vai svān prāṇān. vṛṇkté bhrātrvyasya<sup>20</sup>  
prāṇān.

---

idāṃ savitar vi jānihi śal yamā éka ekajāḥ/  
tāsmin hāpitvām ichante yā eṣām éka ekajāḥ//5//  
サヴィトリよ、これを認識せよ。6人の双子たちと1人で生まれたもの。  
これらのうちの1人で生まれたものである彼のなかに彼らは分け前を探し求める。  
AV 10.8.9  
tiryāgbilās camasā ūrdhvābudhnaś tāsmin yāso nihitaṃ viśvārūpam/  
tād āsata ṛṣayaḥ sapta sākāṃ yé asyā gopā mahatō babhūvūḥ//9//  
横に穴が開いている、底を上にした器、そこに様々な形の栄光が置かれている。  
この偉大なものの守護者たちとなった7人の聖仙たちが、そこで共に座している。  
Brereton 1991: 1-17, Mitchiner 1982: 8-11 参照。

<sup>17</sup> sthātṛ は北極星を指すという説に従った。Thieme 1987: 335-336, Witzel und Gotō 2007: 297, 738 参照。

<sup>18</sup> Brereton 1991: 15 n.19 参照。

<sup>19</sup> Amano 2009: 199 参照。

<sup>20</sup> Mittwede 1986: 56, Sātavalekara 2000: 47 に従った。

彼ら (7 プルシャ) はこの者 (祭主) によって称えられた。彼らは正しく7人の聖仙たちである。7人の聖仙たちは prāṇa たちなのだ。彼はこのように prāṇa たちを称えるのだ。彼は自身の prāṇa たちを称えるのだ。彼は敵の prāṇa たちをねじり取る。

6 (3×2)+1 という構図においては、3機能 (嗅覚、視覚、聴覚) がそれぞれ2つの領域を有し、最後の1機能 (発語機能) だけが1つの領域で活動する。つまり全部で4機能、7領域となる。そして、このMSの prāṇa たちとは7つの領域で活動を促す7 prāṇa たちのことである。

頭部の感覚器官が有する4機能やそれに manas (思考) を加えた5機能は、すでにこれらのテキストの中で認識されているが、<sup>21</sup> KS 19.10 (10, 16-20) には3つの機能、すなわち、視覚、聴覚、発語機能のみが列挙される。また、2-2 で扱った KS 20.8 (27,7-10) には “prāṇās śirṣan vīryam cakṣuś śrotram vāg” とあり、やはり嗅覚がない。vīrya は頭部の prāṇa たちと等置されているとみなすこともできるが、また、諸機能の一つとして先頭に挙げられているとともとれる。その場合、嗅覚を意味する prāṇa が統括的な prāṇa と混同され、或いは同一視され、vīrya に置き換えられたと考えるのは無理があろうか。

MS 3.1.9 (11,8-14) と KS 19,10 (10,16-20) は7つの献供を別個に行うよう規定する。具体的には、マントラを1つ唱えるごとに1回献供するというやり方である。この規定の後に、MSは prāṇa たちは別個の力を持つ

<sup>21</sup> prāṇabhṛt (煉瓦) を置く規定に関連して5つの生体諸機能があげられている：KS 20.9 (28,16-17), TS 5.2.10.3-4, MS 3.2.8 (28,6-7)。但し、MSは prāṇa (氣息)、視覚、聴覚、発語機能の4つのみあげる。MS 3.2.9 (29,10-12) も同様。

KS 20.9 (28,16-17), KpS 31.11 (159,5-6)

apasyā ānu prāṇabhṛta upadadhāti. rétasy evā sikté prāṇām mānaś cakṣuś śrotram vācam dadhāti.

apasyā (煉瓦) たちの次に prāṇabhṛt (煉瓦) たちを置く。他ならぬ撒かれた精子に prāṇa (氣息)、思考機能、視覚、聴覚、発語機能を与えることになる。

また、ŚB 8.1.1.6-8.1.2.6 では、5人の仙人が prāṇā mānaś cakṣuś śrotra vāc と同一視され、更に5 prāṇa たち (氣息) との対応をも示される。

(nānāvīryā) ので、prāṇa たちの分離の為に、と続け、KS は、それ故、prāṇa たちは別個の力を持つ、と結論する。いずれも、7つの献供を別個に行うことと prāṇa たちを分けることを関連付けている。

MS はさらに、全ての〔マントラを〕続けて唱えてから一度に献供するなら、その対象となった人の prāṇa たちは粉々になり、耳が聞こえなくなる。何故なら、indriya が言葉を追いかけるから、という説を披露する。

これらの記述から、本来一つである統轄的な prāṇa は indriya や vīrya と同一視され、それが分離されて、別個の vīrya を持つものとなり、これら vīrya が生体諸機能の原動力であるという構図がおぼろげながら見えてくる。このよう統轄的な prāṇa の存在は以下の個所に認められる。

### 3-2. 新しい祭壇の5層目

煉瓦で積まれた祭壇の5層目に svayamātṛṇṇā という自然に穴が開いている石とある煉瓦を置く場面で、prāṇa と生命 (āyus) に言及される。

#### MS 3.3.1 (32,19-33,4)

prāṇó vai svayamātṛṇṇāyur vāyavyā. samīci upadadhāty. āyus caivā prāṇam ca sayujā akar.

svayamātṛṇṇā は prāṇa で、vāyavyā (風に関わる煉瓦) は生命なのだ。一緒に置く。他ならぬ生命と prāṇa を結びつけたことになる。

#### KS 21.3 (39,14-19), KapS 31.18 (166,3-8)

āyos tvā sadane sādāyāmīty. āyur evottamaṁ dadhāti. tasmād āyuh prāṇānām uttamam.... vāyumatī. prāṇo vai vāyur. āyus svayamātṛṇṇāyus caivāsmin prāṇam ca samīci dadhāti.

「あなたを生命の座に私は坐らせる」<sup>22</sup>と。他ならぬ生命を最高のもの

<sup>22</sup> KS 17.10 (252,13-14), TS 4.4.3.3g

KS 17.10 (252,13-14)

āyos tvā sadane sādāyāmy avataś chāyāyām. namas samudrāya. namas samudrasya cakṣase.//

として与えることになる。それ故、生命は prāṇa たちのうちで最高である。…vāyu という語を含む [詩節が唱えられるレンガ]。vāyu は prāṇa、svayamātṛṇṇā は生命なのだ。これに他ならぬ生命と prāṇa を一緒に与えることになる。

### TS 5.3.7.3

svayamātṛṇṇām ca vikarṇīm cottamé úpa dadhāti. prāṇó vai svayamātṛṇṇāyur vikarṇī. prāṇām caivāyus ca prāṇānām uttamáu dhatte. tasmāt prāṇás cāyus ca prāṇānām uttamáu.

svayamātṛṇṇā と vikarṇī (耳なし煉瓦) を一番上のものとして置く。svayamātṛṇṇā は prāṇa で、vikarṇī は生命なのだ。他ならぬ prāṇa と生命を prāṇa たちの最高のものとして受け取ることになる。それ故、prāṇa と生命は prāṇa たちの最高のものである。

KS と TS は、āyus を prāṇa のカテゴリーに含め、prāṇa たちのうちで最高のものであると宣する。svayamātṛṇṇā と vikarṇī という煉瓦を一番上のものとして置くことで、āyus と prāṇa とが結びつくのである。TS はまた、この prāṇa をも prāṇa たちのうちで最高のものとみなす。この最高の prāṇaこそが vīrya と同置されるものなのだろうか。後に prāṇa は一層明瞭に生命や vīrya などと同一視されるが、以下に ŚB の該当箇所をいくつか提示する。

### ŚB 12.7.2.5

prāṇaḥ sārāsvatī vīryam | yāt sārāsvatō bhāvati prāṇam evāsmimś tād vīryam dadhāty. ātho apānām. samānām hī prāṇás cāpānás ca ||

サラスヴァティーは prāṇa、vīrya である。サラスヴァティーに捧げる [犠牲獣：羊 (ŚB 12.7.2.3)] があるなら、この者 (祭主) に他な

---

あなたを生命の座に私は坐らせる、守護する者の影に。大海に帰命す。大海の澄明さに帰命す。



らぬ prāṇa、vīrya を授けることになる。さらにまた apāna も [授けることになる]。prāṇa と apāna は等しいので。

サラスヴァティーが prāṇa、vīrya と等置されている。次の箇所では、prāṇa たちと yaśas、vīrya が同置されるが、それらが出て行ったあと、体の中に manas が残る。

### ŚB 10.6.5.6

sò 'kāmayata,| bhūyasā yajñéna bhūyo yajeyéti. sò 'śrāmya. sá tápo 'tapyata. tāsya śrāntāsya taptāsya yáśo vīryam údakrāmat. prāṇā vai yáśo vīryam. tát prāṇeṣútkrānteṣu śārīram śvāyitum adhriyata. tāsya śārīra evā māna āsīt.

それ（死から生まれた存在）は願った、「私は更なる祭式によって再び祭りたい」と。彼は疲弊した。彼は苦行した。疲弊し熱くなった彼から、yaśas（栄光）、vīrya が出て行った。yaśas、vīrya とは prāṇa たちなのだ。prāṇa たちが出て行くと、体が膨れだした。その体には他ならぬ manas（思考機能）があった（残った）。

このように、vīrya は ŚB においては5 prāṇa たちの中の prāṇa や prāṇa たちとみなされる。さらに、ŚB 12.7.1.1, 12.7.3.9-10, 12.8.1.1 では、インドラがトヴァシュトリのソーマを飲んで体がバラバラになり、そこから indriya と vīrya が流出した、と描出されているが、ŚB 12.8.3.1 では、indriya と vīrya の代わりに prāṇa となっており、indriya、vīrya と prāṇa との同一視が看取される<sup>23</sup>。

最初の1例を除いて ŚB のこれらの記述に共通するのは、死に類した状況下で prāṇa などが出ていくという設定である。これは以下に挙げる BĀU 4.4.2 の死に際しての描写を想起させる。そこでは prāṇa と prāṇa たち両方が見いだされる。

<sup>23</sup> Blezer 1992: 25, 42 n.27, n.28 参照。

**BĀU 4.4.2(K)/3(M)<sup>24</sup>**

tāśya haitāśya hṛdayasyāgraṃ prādyotate.| tēna pradyotēnaiśā ātmā  
 nīśkrāmati, cakṣuṣṭó vā mūrdhnó vānyébhyo vā śarīradéśebhyas.| tām  
 utkrāmantaṃ prāṇò 'nūtkrāmati.| prāṇām anūtkrāmantaṃ sārve  
 prāṇā anūtkrāmanti.|

すると、つまり、この人（死にゆく人）の心臓の先端が輝き始める。  
 その輝きによりこのアートマンは出ていく、目から、或いは頭頂から、  
 或いは他の身体の諸部分から。それが昇っていくと prāṇa が続いて  
 昇っていく。prāṇa が昇っていくと続いて全ての prāṇa たちが昇って  
 いく。

死に臨み、ātman、prāṇa、prāṇa たちという順で体から脱出するわけ  
 だが、これは高位のものから低位のものという順番であり、ātman の次  
 に出ていく prāṇa は次に出ていく prāṇa たち（生体諸機能）を統括する  
 prāṇa であろう。そして indrya や vīrya と同置された prāṇa はこの prāṇa  
 であると考えられる。

**4. まとめ**

7 という数字は当然頭部の7つの穴を連想させる。しかし、頭部の7  
 prāṇa という場合、はっきりと何であるかが指示されるわけではない。し  
 かも黄金片を置く場所を穴と示すのはMSのみであり、TSはprāṇaと指  
 定し、KSは言及しない。即ち、TSは出口である穴やprāṇaたちの活動  
 領域をもprāṇaとしているが、MSはこれらを区別している。この点に関  
 してKSの態度は他の両者ほど明確ではない。<sup>25</sup>さらに、MSとKSはin-  
 driyaやvīryaをprāṇaと同義のものとなししている印象を受けるが、そ

<sup>24</sup> この部分はその前後と合わせて、後に「輪廻」と呼ばれる過程が述べられている。後藤 2009: 18-20 参照。

<sup>25</sup> このようなKSのMS、KSに対する中立的な有り様は随所で見られる。例えば、新しいĀhavanīya (Agni) を積む際の様々な作業や煉瓦積み of 記述に現れる。Izawa 2016-1: 1061-1066; 2016-2: 75; 2016-3: 143-158 参照。

の記述は未だ明瞭さに欠ける。

7 という数に関しては、6 ( $3 \times 2$ ) + 1 の構図を連想させる。つまり、4 機能と7領域である。元々1つの prāṇa が7つに分かれて、7領域において4つの諸機能を動かしている。この7領域にはそれぞれ開口部があり、死に際して prāṇa はここから出ていくのである。即ち、以下のような流れが想定される。

- ①統轄的 prāṇa
- ↓
- ②7分裂し7つの prāṇa たちとなる
- ↓
- ③4機能として7領域に広がる
- ↓
- ④死などに際して7つの開口部から出る

切断された頭は prāṇa たち (TS, ŚB) 或いは indriya (MS, KS) を失って祭式にふさわしくない。そこで頭の穴に蟻塚 (KS, TS) や黄金片を接置することで、prāṇa たち (KS, TS, ŚB) や indriya, vīrya (MS) により、頭を完全なものにする、というのは、上の④から①への流れを意識しての行為であろう。即ち、蟻塚の中の prāṇa が7つの穴を通して (prāṇa たちとなって)、或いは黄金片が prāṇa たちとして、頭の7つの穴、つまり両目、両耳、両鼻孔、口から注入され、それらがまとまって一つになるのである。

MS が①②を indriya, vīrya とし③を prāṇa たち、④の開口部を穴と呼ぶのに対し、TS は①から④まで prāṇa たちという同じ呼び名を与えたことで、これらを一続きとみなしていることが一層鮮明であり、後にヨーガやインド古典医学などにおいて発展する脈管という概念の萌芽が見いだされる。

#### 略号表

AB            Aitareya-Brahmaṇa

ĀpŚS	Āpastamba-Śrautasūtra
AV	Atharvaveda-Saṃhitā
BĀU	Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad
BaudhŚS	Baudhāyana-Śrautasūtra
KpS	Kaṣiṭhala-Kaṭha-Saṃhitā
KS	Kāṭhaka-Saṃhitā
KātyŚ	Kātyāyana-Śrautasūtra
MS	Maitrāyaṇi Saṃhitā
MānŚS	Mānava-Śrautasūtra
RV	Ṛgveda-Saṃhitā
ŚB	Śatapatha-Brāhmaṇa
TS	Taittiriya-Saṃhitā
VS	Vājasaneyi-Saṃhitā

### 参考文献

Amano, Kyoko (trans.)

[1992] *Maitrāyaṇi Saṃhitā I-II: Übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa*. Bremen: Hempem.

浅野 玄誠

[1985] 「Vijñānabhikṣu (Vij) の Samkhya 観 (1) —prāṇa をめぐる解釈を中心として—」『印度學佛教學研究』33 (2): 535-536.

Blezer, H. W. A.

[1992] “Prāṇa. Aspects of Theory and Evidence for Practice in Late-Brāhmanical and Early-Upaniṣadic Thought.” In *Ritual, State and History in South Asia: Essays in Honour of J. C. Heesterman*, ed A. W. van Den Hoek et al., 20-49. Leiden: E. J. Brill.

Bodewitz, H. W.

[1986] “Prāṇa, Apāna and Other Prāṇa-s in Vedic Literature.” *The Adyar Library Bulletin* 50 (Golden Jubilee Volume), 326-348.

- [1992] “King Prāṇa.” In *Ritual, State and History in South Asia: Essays in Honour of J. C. Heesterman*, ed A. W. van Den Hoek et al., 50–64. Leiden: E. J. Brill.
- Brereton, J. P.  
 [1991] “Cosmographic Images in the Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad.” *Indo-Iranian Journal* 34: 1–17.
- Brown, George William  
 [1919] “Prāṇa and Apāna.” *Journal of the American Oriental Society* 39: 104–112.
- Eggeling, Julius  
 [1894] *The Śatapatha-Brāhmaṇa*, Part III (The Sacred Books of the East 41). Oxford. (repr. Delhi. 1989)
- Ewing, Arthur H.  
 [1901] “*The Hindu Conception of the Functions of Breath*. —A Study in Early Hindu Psycho-physics.—” *Journal of the American Oriental Society* 22-1: 249–308.
- Fujii, Masato  
 [1999] “A Common Passage on the Supreme Prāṇa in the Three Earliest Upaniṣads (JUB 1,60–2,12; BĀU 1,3; ChU 1,2).” *ZINBUN* 34-2: 51–86.
- 後藤 敏文  
 [2009] 「業」と「輪廻」—ヴェーダから仏教へ—『印度哲学仏教学』24: 16–41
- Hoffmann, Karl  
 [1976] *Aufsätze zur Indoiranistik*, Bd. 2. Wiesbaden: L. Reichert.
- 岩崎 眞慧  
 [1961] 「Prāṇa に関する一考察」『印度學佛教學研究』9 (2): 570–575.
- Izawa, Atsuko  
 [2016-1] “In Silence or with a Formula?” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 印度學佛教學研究 64 (3): 1061–1066.

[2016-2] “The Serpent in the Agnicayana: *śarpaśīrṣā* and *śarpaṇāmāni*.” *Journal of Indological Studies* 26-2: 63-82.

[2016-3] “On the Process that Precedes the Piling of New Āhavanīya,” In *Veda and Vedic Literature: Select Papers from the Panel on “Veda and Vedic Literature” at the 16th World Sanskrit Conference*, ed. Hans Henrich Hock. New Delhi: DK Publishers Distributors: 143-158.

Keith, Arthur Berriedale (trans.)

[1914] *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittiriya Saṁhitā*, part 2: kāṇḍas IV-VII. (Harvard Oriental Series 19). Cambridge [Mass.]. (repr. Delhi, 1967)

Mitchiner J. E.,

[1982] *Traditions of the Seven Ṛṣis*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Mittwede, Martin

[1986] *Textkritische Bemerkungen zur Maitrāyaṇī Saṁhitā* (Alt-und Neu-Indische Studien 31). Stuttgart: F. Steiner.

中祖 一誠

[1973] 「ウパニシャッドの生氣説」『印度學佛教學研究』21 (2): 893-896.

長友 泰潤

[2011] 「チャラカ・サンヒターのプラーナ説：他学派の見解との比較考察」『論集』38: 152-143.

[2017] 「ブラフマスートラのプラーナ説：俱舍論の風説との比較研究」『南九州大学研究報告。人文社会科学編』47: 23-27.

[2019] 「ブラフマスートラのプラーナ説：チャラカ・サンヒターの風説との比較研究」『南九州大学研究報告。人文社会科学編』49: 11-18.

Sātavalekara, Śrīpāda Dāmodara (ed.)

[2000] *Yajurvedīya maitrāyaṇīsaṁhitā*. Pāraḍī, Ji. Balasāḍa: Svādhyāya-Maṇḍala.

Schroeder, Leopold von (ed.)

[1885] *Maitrāyaṇī Saṁhitā, die Saṁhitā der Maitrāyaṇīya-Śākhā* III.

Leipzig. (repr. Wiesbaden, 1972).

Thieme, Paul

[1987] “Das Rätsel RV 1.164.15–16.” In *Hinduismus und Buddhismus: Festschrift für Ulrich Schneider*, ed. Harry Falk. Freiburg: Hedwig Falk: 329–338. (= *Kleine Schriften*. Stuttgart: F. Steiner. 1995: 956–966.)

Wackernagel, Jacob und Debrunner, Albert

[1954] *Altindische Grammatik* II, 2. *Die Nominalsuffixe*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Witzel, Michael und Gotō, Toshifumi (trans.)

[2007] *Rig-Veda: das heilige Wissen*/aus dem vedischen Sanskrit übers. und hrsg. von Michael Witzel und Toshifumi Gotō; unter Mitarbeit von Eijirō Dōyama und Mislav Ježić. Frankfurt am Main: Verlag der Weltreligionen.

Zysk, Kenneth G.

[1993] “The Science of Respiration and the Doctrine of the Bodily Winds in Ancient India.” *Journal of the American Oriental Society* 113-2: 199–213.

キーワード: 7つの prāṇa たち、Agnicayana、頭部、indriya、vīrya、7 聖仙、北斗七星

## Summary

### On the Seven *Prāṇas* of the Head

Atsuko Izawa

In several places in the Agnicayana, we find formulation of seven *prāṇas* of the head. Although these play an important role in certain rites, where the severed heads are treated, the precise nature of the *prāṇas* is unclear. This paper examines the relevant portions of the texts in order to elucidate the substance of the seven *prāṇas*.

Severed heads are considered not fit for sacrifice as they are devoid of *indriya* (MS, KS) / *prāṇas* (TS, ŚB) and are made complete by means of ritual objects, an anthill and chips of gold. The anthill is regarded as having *prāṇas* (KS, TS). The chips of gold are regarded as *prāṇas* (KS, TS, ŚB) or *indriya*, *vīrya* (MS); only the TS designates the places for the chips of gold as *prāṇas*. The MS, however, calls these places *chidras* (orifices), while the KS does not mention them at all.

The description of seven *prāṇas* seems to suggest the set of three pairs and one (3 x 2 + 1) of seven seers, Ursa Major. One *prāṇa* is divided sevenfold and, while alive, promotes the four vital functions in the seven spheres, i. e., orifices, through which the *prāṇa* departs upon death. The following sequence can be suggested: ① *prāṇa* as a supervisor; → ② *prāṇa* is divided into seven and becomes seven *prāṇas*; → ③ *prāṇas* as four vital functions spread to seven spheres; → ④ *prāṇas* go out through the seven exits upon death.

Supervising *prāṇa*, which is originally single, is identified with *vīrya* or *indriya*. When *prāṇa* is separated, *vīrya* or *indriya* is also divided and puts the vital functions into action.

The action of infusing the heads with *prāṇas* reflects the reverse flow



(from ④ to ①), that is, *prāṇa* in the anthill or in the chips of gold is infused into the head through the seven orifices as the seven *prāṇas*, which then gather to become one *prāṇa*.

The MS designates ①② *indriya*, *virya*, ③ *prāṇas*, and exits of ④ *chidras* (orifices); in contrast, however, the TS calls ①–④ *prāṇas*. This fact suggests that the TS considers ①–④ to be a series more clearly than the MS. This concept is associated with the later notion of vein.

*Library Staff,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*